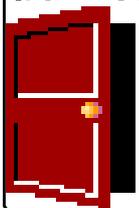


令和5年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



# 読書活動への扉を開く！

N o 66

桑村小学校令和5年11月14日 文責 渡邊

## 「自分が変わる」ことの意味と大切さ!!

養老孟司氏の『ものがわかるということ』という本を読みました。この本の帯には次のように書かれていました。

「学ぶことは『わかる』の基礎になる考えることが自分を育てる

「わかる」とはどういうことなのか、それが「わからない」。じゃあ説明してみましょうか、ということでこの本が始まりました。それなら私が「わかるとはどういうことか」わかっているのかと言えば、「わかっていない」。「わかって」いなくても、説明ならできます。(中略)訊かれた以上は、何か答えるというのが、教師の抜きがたい癖なのです。(本文より)

私は、本を購入するときには、まず帯を読み、それから、「まえがき」、「目次」を確認し、購入するかどうかを決めます。「あっ、これいいな」と感じたら、その場で購入します。今回も同様です。購入しないで後悔しないようにするのです。

この本はとても納得できる一冊となりました。

私は、これまで本を読み、参考になったところを書き出すことにしています。そして、それをデータ化し、職員研修等に活用しています。

本を読むという行為だけでは受け身の行為で終わります。しかし、本を読むことで自分がどういうことを感じ、考えたのかを表現することで自己の思考が深まり主体的な活動となるように思います。

本校の子供たちは、読書後に「読書記録」として感想等を記録しています。これが果たして読書活動に必要であるのかと問われれば、私は「必要である」と答えます。読書から得たものを自分なりに表現することで「豊かな感性」や「深い思考力」等が育まれることが期待されるからです。

そこで、今回は、養老孟司氏の『ものがわかるということ』を読んで、「ものがわかるということ」とはどういうことなのかを考えてみることにしました。

第一章「ものがわかるということ」では、「知るとは自分が変わること」(P36～P38)と述べられています。また、養老氏は「知」が技法に変わったことも憂えています。「どういふふう知識を手に入れるか、それをどう利用するかというノウハウに、知というものは変わってしまった。しかし、教養はまさに身につくもので、技法を勉強しても教養にはなりません。ただ、勉強家になるだけです。」(P37)

「自分を変える」という言葉をこれまで私は大切にしてきました。子供とともに成長し続ける自分でありたいという思いをずっと胸に秘め、教育書をはじめとする様々な分野の図書を読み、これからの子供たちに必要となる力とは何かを問い、授業を柱とする学校運営で実践することを通し、自分自身のアップデートに努めてきたのです。

これからも桑村小学校では、子供も教職員もともに読書体験と表現活動をつなぐことで「豊かな感性」を育んでいきたいと考えます。

※本校のHP「桑村小アップデート」もご覧いただけたら幸いです。



【校長室の書棚】

